

## ◆ 名 誉 会 員 の 紹 介 ◆

去る5月15日の第13回通常総会において、後藤以紀、齋藤有ならびに A. A. Dorodnicyn の3君が、多年国内的あるいは国際的に情報処理の分野において顕著な業績を挙げ、また、本学会の事業運営に特別の功績があったので、定款第6条によって名誉会員に推薦されました。ここに、後藤以紀、齋藤有両君の経歴を紹介します。(なお、A. A. Dorodnicyn 君の経歴は都合により掲載を延ばします。)



後藤以紀君

後藤以紀君は京都市の出身で、昭和2年東京帝国大学工学部電気工学科を卒業、ただちに電気試験所(現工業技術院電子技術総合研究所)に入所、電気試験所長、工業技術院長、東京工業大学教授の要職を歴任し、その間昭和17年より東京大学教授を兼ね、昭和40年停年退官後は明治大学教授に転じ、その50年におよぶ広範囲の研究活動、研究行政、教育を通じて電気、電子、情報処理の諸分野の発展に寄与した。

すなわち昭和2年猪猫代送電系統に発生した不減衰電気振動の解明と防止、それを単純化した概周期振動および分数調波発生回路の研究とその応用、四元双曲数の理論の創設、ラプラス変換または逆変換の発散する場合を含む演算法、電磁界理論、非線形振動、送配電系の異常現象などの研究を行い、多くの実際問題を解決した。また論理代数に遅延演算を導入して論理数学を創設し、これにより順序回路理論を構成し、我が国最初の計数型自動計算機 ETL Mark I および II を建設、我が国電算機技術の発展、育成に尽力してきた。この間、電気学会浅野博士奨学祝金(現、功績賞)(昭和16年)、電気学術振興賞(昭和25、31年)、電子通信学会功績賞(昭和45年)を受けた。

また郵政省電波技術審議会、通産省工業標準調査会、工業技術協議会大型プロジェクト電子計算機分科会、新技術開発事業団開発審議会などの各委員、日本学術会議会員、電気学会会長(昭和35年度)、情報処理学会第二代会長(昭和38、39年度)を歴任して草創期の本会の育成に努力し、情報処理の基礎研究に関する科学研究費の特定研究部門の新設、私立大学の電算機のレンタル補助金の新設を達成した。



齋藤有君

齋藤有君は、新潟県に生まれ、昭和9年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業し、翌10年に陸軍科学研究所員となって、超短波、無線通信、高層気象観測用機器などの研究に従事し、続いて通信機器等電波兵器全般の研究を重点的に行う陸軍研究所の必要を提唱してこれを設立し、現在における電子工業の研究基盤を醸成した。

戦後は、昭和27年から(財)電波技術協会常務理事に就任し、続いて昭和33年に(社)日本電子工業振興協会の創立と同時に常務理事に就任、専務理事となってわが国電子工業、とくに電子計算機、自動制御機器、電子部品・材料などの振興に尽力し、現在における業界の発展に貢献した。

またこの間、電子計算機など電子応用機器の発展に伴う情報処理に関する技術開発ならびに産業の確立について早くからその重要性を提唱し、情報処理技術開発の調査研究、要員教育など各種振興事業を実施して現在の情報化時代における情報処理産業発展の基礎を築くとともに、(社)情報処理学会の創立に尽力し、昭和35年4月から40年5月の間同学会監事に就任した。

さらにわが国における情報化の進展に伴って設立された(財)日本情報処理開発センター、(財)情報処理研修センター、(社)情報処理振興事業協会など各種関連団体の役員に就任して情報処理産業の確立に尽力するとともに、電子工業、情報処理に関する政府関係機関の委員に就任するなど広範にわたる公職を通じて、わが国における電子工業ならびに情報処理産業の振興につとめ、その発展に貢献した。